

SEEDS



No.225
2015 / 冬号

自然特集

モモンガをさがしに

活動レポート

ロシアでのカワウソ調査

>>知床・人・インタビュー 第22回
阿部幹雄さん

>>スタッフの本棚 第15回
空の青さを見つめていると

>>知床財団 購買部
羅臼の神山水産「知床雑貨」

>>知床財団 この一品 第4回
注射針

写真：ナナカマドの実をついばむツグミ



★ = 各川の調査ポイント
シホテアリン自然保護区
ダルミン川
ヤースナヤ川
ゴルビチュナヤ川
ミログラトフカ川
ウラジオストク
知床
カワウソが暮らすロシア沿海地方のミログラトフカ川とシホテアリン自然保護区のゴルビチュナヤ海岸とヤースナヤ川、ハバロフスク地方のダルミン川の3箇所4地点で川幅や水深、川床の礫のサイズや河畔の樹種、植物の川面への被覆率などについて調べてきました。
調査隊長は知床博物館の村上学芸員、サポートに知床財団の石名坂、野別、そしてロシア科学院アカデミー極東支部でカワウソの研究をしているオレイニコフさん、運転手のウラジミールさん、通訳のタラソワさんの6名です。

どんな調査?

ゾフティイグラ（ロシア語でゾフは鳴き声、ティイグラはトラ）自然保護区を流れる大きな川です。川幅は広く、水量も豊富です。このあたりでは前の週にまとまった雨が降ったことで、かなり増水していました。知床の川では増水しても数日で通常の水量に戻りますが、さすが広大な大陸で、一度増水するとなかなか元の水量には戻らないようでした。河原を歩くと、すぐにカワウソの足跡を見つけました。また、糞も河畔のあちこちに落ちていました。オレイニコフさんが、カワウソが何を食べているか調べるために仕掛けたワナには、知床でもおなじみのヤマメやチウグイ、ホトケドジョウが入っていました。



ミログラトフカ川

カワウソは、世界に生息しているイタチ科の小型哺乳類で、かつては北海道から九州までの日本各地に生息していました。私の出身、九州宮崎の田舎にも生息していたようで、子供の頃に近くの川に泳ぎに行くと、昔ここにはカワウソが棲んでいたのだとか父から聞かされたのを思い出します。しかし、日本国内では1990年代まで、北海道ではそれより前の1950年代に絶滅したと考えられています。

知床では、かつての開拓による耕地をもとの森へ戻す流れで100平方メートル運動が進められています。この運動では森の再生だけでなく、姿を消した生き物の復元も目標の一つになっています。そこで、知床財団では、斜里町立知床博物館とともにダイキン工業株式会社様からの寄付金事業として、カワウソの復元検討にかかる調査を行っています。2012年と2013年には、今でもカワウソが生息している樺太へ行つて遺伝子分析用の標本を集めながら、カワウソが何を食べて暮らしているのかを調べるため、

活動レポート ロシアでのカワウソ調査



文 - 野別貴博

羅臼地区事業係長。
知床の魚博士。趣味は温泉めぐり。知床にとどまらず道内各地を走りまわる。

糞を採取しました。そして今年の9月、カワウソが広く一般的に生息しているユーラシア大陸で、彼らが好む生息環境について情報収集するため、ロシアの沿海地方とハバロフスク地方に行つてきました。



ゴルビチュナヤ海岸



ダルミン川

これまでに調査をしたミログラトフカ川やヤースナヤ川はシホテアリン山脈の海側でした。ダルミン川は陸側にあります。ダルミン川は陸側にあります。ダルミン川は陸側にあります。ダルミン川は陸側にあります。

これまでに調査をしたミログラトフカ川やヤースナヤ川はシホテアリン山脈の海側でした。ダルミン川は陸側にあります。ダルミン川は陸側にあります。ダルミン川は陸側にあります。ダルミン川は陸側にあります。

これまでに調査をしたミログラトフカ川やヤースナヤ川はシホテアリン山脈の海側でした。ダルミン川は陸側にあります。ダルミン川は陸側にあります。ダルミン川は陸側にあります。ダルミン川は陸側にあります。



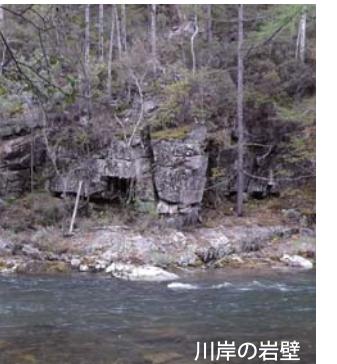
海岸線の川が流れ込むところの砂浜の上には、カワウソの足跡を見つけることができました。カワウソは、川だけでなく海も利用するそうです。海の生き物専門の私としては今回、最も楽しみにしていました。調査地でしたが、保護区の海に潜ることはできいため、海岸に打ち上げられた貝殻や漂着した生き物や海藻探しとなりました。それを見れば、あたりの海の中の様子を想像することができます。この浜では、知床にも普通に見られるユキノカサガイヤエゾキンチャクガイ、エゾバフンウニの貝殻や殻を見つけることができました。また、

リシリコンブと思われるコングブ類もたくさん漂着していく冷たい海の要素を見ることができました。



一方で、暖かい海に生息している、死にそうな变成了たボラの仲間を見つけました。おそらくこのボラは、暖流にのってここまで辿りついたのだと考えられます。このことから、シホテアリンの海も知床と同様に冷たい海に暖かい海流の影響を受けているのだろう、と感じることができました。

突き出た岬の岩礁には、たくさんの「コマツアザラシ」が横たわっていて、鳴き声まで聞こえています。その様子をビデオ撮影する鰐脚類の専門家、石名坂研究員の顔は真剣そのものでした。



ヤースナヤ川

まとめ

私は今回ロシアへ行くまで、知床を含む北海道内で再びカワウソが生息するのは難しいのではないかと漠然と思っていた。しかし、調査を終えて知床の川を改めて見てみると、カワウソの餌となるであろうエゾアカガエルやオショロコマがたくさん生息しています。カワウソに好まれそうな倒木や岩穴もあちこちにあります。今の段階での復元には、人の営みとの軋轢や他種との餌生物の競合など、まだまだ様々な課題があることは言うまでもありません。

しかし、何十年先かもしれないが、状況が許す時が来たときの備えとして、今のうちから基礎的な情報を収集し、復元の可能性について検討しておくことを大切だと感じています。

今回の調査を終えてハバロフスクから成田への帰途についた時、知床のことをふと考えました。何よりも今回の調査で感じたことは、大陸は知床とは比べものにならないほど圧倒的に広く、自然の規模がケタ違いだということです。

が、シカ違ひだということです。知床と同じ世界自然遺産に登録されているシホテアリノ自然保護区だけをとっても面積は知床の約7倍ですが、自然保護区の周辺にも途切れることなく森が広がっていることを知りました。逆に言うと、知床の約7倍の自然保護区は広大な森のごく一部に過ぎないのです。

私たち知床調査員3名は、「知床は箱庭だ」と口走っていました。箱庭には自然があることに大自然を前にしまいました。箱庭には自然の素晴らしいところが凝縮されているのですが、美しさを

シホテアリン自然保護区の中を流れれるセレブリヤンカ川の支流で、知床でいうと半島中部にあるルシャ川の中流から下流に似た霧氹気で、やや水量が多い印象でした。ここにも河原の岩盤や川岸に横たわる倒木の上にいくつものカワウソの糞が落ちていました。また、川岸の岩壁にはあちこちに大きな穴があり、オレイニコフさんによるとカワウソはその中に隠れ、休息することができました。餌の種類や量だけでなく、隠れたり休憩したりする環境もカワウソにとって大切なのだそうです。



シホテアリン自然保護区との協定

知床とシホテアリンの自然環境保全や観光としての資源を賄明に利用していくためには、自然科学、社会科学に関する基礎的な情報が必要です。そこで、両地域での学術協定を知床財団、知床博物館とシホテアリン自然保護区の三者で締結してきました。今後、学術的な協力を進展させることはもとより、世界的な保護区間の研究ネットワーク強化につなげていきます。



箱庭の知床

にはとても労力がかかります。箱庭は除草をしないとすぐに雑草だらけになってしまいますが、大自然は自然の推移に任せておけば壮大な美しさが保たれるということなのではないでしょうか。

知床では、増えすぎたシカにより植生が変わってしまつたため、シカの密度を調整したり、植生を保護するための柵を作ったり様々な管理がなされています。一方で、広大な面積のシホテアリン自然保護区では、自然の推移を保つための密猟対策が大変とのことでいた。

素晴らしくも不安的で脆弱な箱庭のような知床には、丁寧で慎重な管理の必要性が高く、知床を活動の場とする私たちは、様々な自然の変化に敏感でなくてはならないといふことを改めて感じました。